

富士の麓で木育、防災学習

恩賜林で溶岩の断面見学 森の持続可能性学ぶ

山中湖村の山中小と東小の交流事業が5月12、13の両日、同村内や富士吉田市内にある富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合の森などで開かれた。山梨日日新聞社が発したカードゲーム「moritomirai(モリトミライ)」を体験したほか、富士山の溶岩流の断面が見えていく露頭などを見学。恩賜林内に設置された観察歩道の散策も行い、統合を控えた両校の児童は仲を深めた。



溶岩の断面の前で記念撮影する山中小と東小の児童ら＝山中湖村内

両校の5年生約40人が参加した。山中湖村教委によると、両校は校舎の老朽化や児童数の減少などを背景に、2028年度に統合する予定。統合に向けた取り組みとして、数年前から交流事業や合同での行事を実施しており、子どもたちの交流をさらに進めようと、初めて宿泊を伴う事業を企画し、同組合が協力した。

12日、富士吉田市内にある組合の森林学習施設「ふじさんのぬく森キボキボ」に集まった児童は、カードゲーム「moritomirai」を体験。3、4人のチームに分かれ、一つの町に住んでいるという設定の下、チームごとに「木を切る人」「販売会社の社員」など10の役割のうち一つを担当。「材木を販売する」「スマート林業を導入する」といった行動を示すカードを使い、どの行動をすれば森林にどのような影響がでるのかを考えながら使うカードを選択した。「森への愛情」や「整備力」など森林の現状を示す四つのメーターに配慮しながら、資金の獲得など役割ごとに定められたゴールを目指した。児童からは「協力することの大切さを学んだ」「森や木などに興味を持てた」などの感想が出た。



仲間と協力しながらカードゲームを行う児童＝富士吉田市内

富士山噴火の痕跡が残る恩賜林内で、児童は壁のように反り立つ溶岩の断面も見学。約1500年前に富士山が噴火して流れ出た溶岩で、高さは約5メートル。普段は許可なく立ち入ることができない場所にある。

同行した県富士山科学研究所の吉本充宏研究部長は「かつては、溶岩を建築資材にしたり、森林を整備したりするために溶岩を切り出したことで、壁のようになった」と説明。溶岩は、冷える速度によって形が変化することや、溶岩が樹木を飲み込むと、表面が急激に冷えて固まり、その後、木が燃えたり腐ったりして空洞となる「樹型」について、実物を見ながら解説した。また、富士山噴火が起こった場合の影響や必要な備えなども示した。



富士山の溶岩について説明する吉本充宏研究部長＝山中湖村内



自然解説員の案内で恩賜林の森を散策する児童＝富士吉田市内

施設の自然解説員から森に生ずる植物の種類や、生息する生き物について説明を受けた。山中湖の堀内弥校長は「デジタルトランスフォーメーション(DX)や情報通信技術(ICT)などの進歩により、私たちの生活は効率や時短が重視され、『私たち人間は生き物』という感覚は薄れつつある」と指摘。「カードゲームや自然散策など、自然に触れ合うことは私たちに長期的な視点で物事を考える力を養ってくれるとともに、身近で当たり前になっている自然の大切さを気付かされる良い機会になった」と話していた。



山中小
杉浦拓和さん

持続可能な森をつくるのは、カードゲームでも難しかったので、現実の社会だともっと難しいと思いました。お金が必要なチームにお金を寄付するなど、みんなで協力できました。溶岩の断面の見学では、溶岩がどのようにしてできているのを知ることができて楽しかったです。



東小
城凛之介さん

恩賜林の森の自然散策では、松ぼっくりなどをたくさん見つけることができて楽しかったです。富士山のこともしっかり勉強でき、富士山噴火などの災害が起こった時に何を備えておけば良いのかもよく分かりました。山中小の友達とも仲良くなれたので良かったです。

県富士山科学研究所 吉本充宏研究部長

富士山がどうしてできたのか、その成り立ちを知り理解することは、どのようにして災害が起こるのか、ひいては災害への備えについて考える上で大切です。小学5年ごろから中学生年代で地震や火山、災害について教科書上で学びますが、実際に溶岩を前にして見て、触れてみることでそのスケール感を実感できます。実物を見ることは何よりも大事なことで感じています。



宿泊学習の行程

日時	内容
5月12日	ふじさんのぬく森キボキボ到着
	アイスブレイク(自己紹介など)
	カードゲーム「moritomirai(モリトミライ)」体験
	昼食
	土丸尾観察歩道で自然散策
5月13日	溶岩の断面見学 富士山噴火の痕跡を観察
	本栖湖スポーツセンターに宿泊
	本栖湖スポーツセンターで終日活動

問い合わせ

富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合 ☎0555-22-3355